

近世後期に於ける鎌倉禅について

——月船禅慧を中心として——

笹尾哲雄

第一章 近世の臨濟禅と月船禅慧

近世の臨濟禅を概観すると直接に権力と結びつかなかったせいも、全般的にふるわず、また中世の五山文学の伝統も萎微沈滞してしまっている。⁽¹⁾

しかし、その反面、庶民化の傾向が著しく数多くの禅僧によって、その教えが庶民にまで広まっている。

前代に盛んであった五山派は衰え、これに代って新興の関山派(妙心寺派)が大きな勢力を占め、この時代の臨濟禅の中心的役割を演じた。

この時代の名僧をみると殆ど妙心寺派の人が多く、初期には、愚堂東寔(美濃大仙寺)、雲居希膺(奥州瑞巖寺)、大愚宗築(越前大安寺)、至道無難(江戸東北寺)、一絲文守(丹波法常寺)、盤珪永琢(伊予如法寺)などが出世し、中期には、古月禅材(日向大光寺)と白隠惠鶴(駿河松蔭寺)の二師が出世して近世の禅林を復興している。⁽²⁾

とくに白隠惠鶴は、「応灯関」の一流を再興して、近代化された看話禅を大成し、五百年間出の偉人と称されてい

ることは周知の事実である。今日の臨濟禪は、白隠の門流といつても過言ではない。⁽³⁾

しかし、ここに、もう一人、近世の禪宗史上、忘れてはならない禪者がいる。それは、古月、白隠に少し遅れて出世した月船禪慧である。

明治以前に関東にあって鶴林派（白隠下）に対抗して法幢を掲げたものに「鎌倉禪」とよばれる一派があったが、この「鎌倉禪」の始祖こそ月船禪慧である。

今日、わが国の臨濟禪は、所謂、鶴林派すなわち隠山、卓洲の両系に占められ、それ以外の法系は、事実上、存続していないが、少なくとも明治以前までは月船の法系も続いていたのである。

月船下は、古月派の亜流とみなされがちであるが、私は、古月、白隠の二派と並称されるべき一派とと思っている。

月船は、関山派（妙心寺派）の人でありながら晩年、円覚寺派の一寺院に寓居し、当時、既に禪の生命を失っていた「鎌倉禪」に息吹きを与えた。

月船の法系は江湖に「鎌倉禪」と称され、主として鎌倉の円覚寺を中心として発展し、幕末には、京都五山にも及んでいる。

「鎌倉禪」の家風は、鶴林派から「一枚悟り」あるいは「鍋蓋禪」と中傷されているが、⁽⁴⁾実は禪定中心の厳しいものであったらしい。以下、月船禪慧を中心に「鎌倉禪」が如何に発展して行ったかを考察してみたい。

(1) 辻善之助著「日本仏教史近世編」、今枝愛真著「禪宗

の歴史」

(3) 前掲書。

(4) 破有法王著「現代相似禪評論」、玉村、井上共著「円

(2) 川上孤山著「妙心寺史」

覚寺史」

第二章 月船禅慧とその家風

第一節 月船禅慧の法系について

月船については従来、多くの禅宗史関係の書物では、古月禅材（日向大光寺）の法嗣、あるいは古月の門下、北禅道济（奥州高乾院）の法嗣として記されている。⁽¹⁾

しかし月船を簡単に古月あるいは北禅の法嗣とみなす従来の説には納得できない点がある。

そこで、まず、月船について諸側面から考察をしてみたい。

月船は、法諱を禅慧といい、奥州田村郡小野邑の人といわれている。生誕の年月は不明だが、天明元年（一七八二）に八十歳で示寂している⁽²⁾ので、これから逆算して元禄十四年頃の生まれということになる。

月船の生まれた頃は、元禄文化の華かな時代であった。

月船は幼くして三春城下の高乾院の北禅济老について落髮受具し、長じて四方に歴参した。後に東溪智門の後席を嗣いで受業寺の高乾院に住山した。

妙心寺の「前堂著旧牒」によれば享保二十年（一七三五）三月に妙心寺で垂示をし第一座に昇っている。

高乾院に住すること十余年、延享の頃に武州永田の宝林寺（円覚寺派）の境内に東輝庵を営み、三十七年の間、四來の雲納に接したのである。

月船が古月の法統に属する禅匠であるという説の根拠をなすものは次の二点であると思われる。

一、月船の本師（授業師）の北禅が古月に就いて多年参究した龍参底であったこと⁽³⁾。従ってその弟子、月船は古

月の系統である。

二、月船は、下総の光福寺の玉洲祖憶、武州長徳寺の海門元東など関東の古月下の宗匠に歴参したと思われること。⁽⁴⁾

しかし、この二点は単に月船が古月と間接的な関係にあったことを示すのみである。これを以って直ちに月船を古月あるいは北禅の法嗣とするには少し無理があるようである。

まず第一の根拠では、月船の師、北禅は、「古月録」に、その道号頌が載って居り、古月下という。

北禅は、初め松洲と号したといわれ「古月録」に次のような道号が記されている。

松洲号後改
北禅

枝々卓拔接ニ雲霧。秀色全憑ニ雪後真。丹鳥振レ翎臻レ頂月。沙汀千里眼初明。

また北禅と改名後に道号を頌されたものもある。

北禅右同

大法由来無ニ頓漸。一団生鉄看如何。李唐天子尊崇外。神秀徳暉余沢多。⁽⁵⁾

ここで気になるのは右同という註記である。北禅の道号頌は、仙嶽という奥州仙台の資福寺の徒の道号頌の次に記されているので、右同ということは北禅も奥州の資福寺の徒ということになる。

実は、奥州仙台の資福寺にも北禅という同名の人がいた。

「嘉永重撰正法山宗派図」(東海派)の天縱門派の項に次のように出ている。

休巖義長―量外禅寿―曹溪玄亨―北禅元貞―柱巖元礎―溪禅元晴

この法系に出てくる量外は、「古月録」の中にある「喜奥陞仙台寛範寺量外和尚之至」の量外のことらしく、また曹溪は、古月の法子で道号の頌を受けている。⁽⁶⁾

北禅元貞は、このように古月とは因縁が浅からず「古月録」に出てくる北禅は、奥州三春の高乾院の北禅ではなく奥州仙台の資福寺の北禅という可能性が強い。

「円覚寺史」によると北禅元貞は、延享三年（一七四六）鎌倉の寿福寺で雪安居が結制された際に海門元東（長徳寺）万拙碩誼（建長寺天源庵）などと共に、これに参加しているし、その折、東慶寺方外庵に大休正念の木像を拝し、翌年、これを修理している。

また「鹿山公私諸般留帳」によれば北禅元貞は、明和六年（一七六九）までの間一二年、仮住とは言え円覚寺派の上総の矢那の棲安寺に拝請され住山したといふ。⁽⁷⁾

近世鎌倉禪の祖といわれる月船禅慧は、奥州三春の高乾院の北禅の剃度の弟子であったことは、先にも述べた如く天明二年（一七八二）三月に高弟の物先海旭の撰した「武溪集」の序文によって知られるが、月船が古月下の北禅の法子であるという確証は何もない。

繰り返すが、「武溪集」の序文に「投_三郡之高乾北禅济老_一落髮受戒」と記されているので月船が高乾院の北禅の弟子であったことは、わかるが、その北禅が果して古月下かどうかは疑しい。従って月船を古月下の法系とする根拠は、何もないのである。

「続禅林僧宝伝」では、北禅は、常陸州高乾院北禅禅師となっているが、実は常陸の高乾院ではなくて奥州三春の高乾院の間違いである。

また北禅は、享保八年（一七三三）に示寂しているが、月船は、この時には、まだ二十歳前後の若輩であった。

次に第二の根拠では、月船が、たとい、古月下の禅匠に歴参したとしても古月には直接に参じていない。また玉洲や海門と月船は、師弟関係にあったという史料は、今の処、全く見当らない。それ故に古月の法嗣あるいは法孫と断定する訳にも行かないのである。

以上の如く、月船を以て古月あるいは北禪の法嗣とみなすことは、できない。

また月船の住した三春の高乾院についてふれると同院は、もと湊福寺と称し、三春藩主、秋田信濃守の菩提所であった。⁽⁹⁾

「高乾院記録」⁽¹⁰⁾によると同院は、仏源禪師大休正念の開山といわれ、元は羽州秋田湊（秋田市土崎港）にあったが、慶長七年（一六〇二）土崎城主、秋田城之介実季の常州宍戸転封に伴なって常陸に移転している。その後、秋田河内守俊季が常州宍戸から奥州三春に移封されたので高乾院は、この時、三春にも建立された訳である。従って高乾院という寺は、常州宍戸と奥州三春の二ヶ所にあった。

月船の住した寺は前者ではなくて後者の方であった。

因みに月船の伽藍法系は、「嘉永重撰正法山宗派図」（東海派）の玉浦門派の項によると次の如くである。

物外紹播—笑峰宗訴—頂山宗鎮—北源祖阮—天宗祖憚—別峰祖辨—周道支需—周峯周甫—虎瞳忍昌—

—北禪梵秀—東溪智門—月船禪慧—喝巖智連—岳陽宗観—無業正禪—蘭嶺子淳

三春の高乾院は、右の法系の北源祖阮によって正保年間に建立された。月船の法祖、物外紹播（勅諭播揚大教禪師）は、宇都宮の興禪寺に住した名僧で秋田実季（高乾院殿）の父、愛季の画像に贊をしている。⁽¹¹⁾

月船の受業師、北禪は、ここでは諱を梵秀と称し、虎瞳忍昌に嗣法しているが、この虎瞳は、高乾院の前身たる三春の湊福寺に住し、宝永七年（一七一〇）六月六日に遷化している。⁽¹²⁾

高乾院の前身、湊福寺には、右の法系中の別峰祖弁、周道支需の二師も住しているから高乾院と改称したのは虎瞳から北禪の頃であろうか。

なお法系図で知られることは月船は授業師、北禪の法嗣の東溪智門なる人に嗣承しており、法系上では北禪の孫弟

子になっているということである。このことは北禅が月船の大成を待たずに早く示寂したことを意味し、月船が北禅の寂後、東溪智門に師僧転換したことを物語るものと考えられる。

玉村竹二氏は、月船の本師、北禅は、仙台資福寺の北禅元貞と同一人物ではないかという仮説を立てて居られるが、これは肯われない。何故なら高乾院の北禅と資福寺の北禅とは同じ東海派に属すとは言いつら、前者は、玉浦門派、後者は天縱門派の法系で法脈が異なるからである。⁽¹⁴⁾ 常識から考えて同一人物が宗派図に重複して記されていることはあり得ないことである。しかも高乾院の北禅は、享保八年の示寂であり、資福寺の北禅は、時代が、もっと下がるようである。

とにかく、いずれにしても月船は東溪智門の法を嗣いで三春の高乾院に住したのであり正しく妙心寺開山、関山慧玄の流れを汲む禅者であった。

さて、前述の如く、月船については、その修行経路、嗣承（人法）に関しては殆ど不明で、その禅風の由来について詳しく知ることができないのは残念である。思うに月船は、諸国の名師に歴参して法器を大成したのであり彼自身、その上に独自の家風を作ったというべきであろう。

第二節 月船禅慧の禅風

月船の禅風について考察することは、きわめて困難である。その語録「武溪集」を見てみると頌古や公案の拈弄が多く難解である。

また、その反面、神農、老子、太公望、顔回、朱買臣、東坡、子路、蔽子陵、関羽などに関する詩偈もあることから、儒教思想の影響が大きいことが知られる。⁽¹⁵⁾

月船の語録を「武溪集」というのは次の七言絶句に由来するという。

送僧

誰家吹笛雨成霖。五月海南多毒淫。行矣不曾為君說。老僧猶在武溪浚。

偶成

鳥不度兮獸不臨。天南天盡武溪浚。老僧八十頭如雪。人道此居多毒淫。⁽¹⁶⁾

月船の所居が武州の片田舎で、しかも、その居は武溪の深い処で毒淫が住んでいるという意味で名付けられたらしい。

月船は、名利を好まない人であつたらしく高乾院に住山すること十年余にして弟子の喝巖智連に席を譲つて退隠し、武州永田の宝林寺の一角に東輝庵を営み、そこに隱栖した。

「武溪集」には、住庵と題する詩、四首が出ている。

住庵

曾自江西行脚還。十年風雨掩柴閑。常公不識庵中趣。又捲荷衣出暮山。

又

蓮華峯北竹溪南。借箇蒲団坐草庵。將謂山中無一事。又隨月色下煙嵐。

又

一臥十年浚鎖閑。白雲明月照衰顏。丁丁伐木如相問。人在西山煙翠間。

又

白雲浚鎖舊青山。一枕清風萬境閑。入海泥牛絕消息。隨流菜葉到人間。

これらの詩をみると月船の澄んだ心境が窺われ、彼が如何に自然を愛し、また清貧な生活を送つた人であつたかが知られる。

関山派（妙心寺派）の月船が、何故、円覚寺派の宝林寺に隠れ住んだのか明らかではない。

玉村竹二氏の説によると三春に近い須賀川に円覚寺派の普応寺という名刹があり、同寺は高乾院と往来頻繁であったことから、月船は普応寺との因縁で宝林寺の佳境を知ったのではないかと言われている。⁽¹⁷⁾ おそらく、その通りであろう。

宝林寺は、永田山と号し、開山は大雅省音和尚で開基は、服部玄庵と伝えられている。開山の大雅和尚は応永二十六年（一四一九）に寂しているので相当に古い寺である。⁽¹⁸⁾

月船は、妙心寺の開山、関山慧玄の美濃伊深山中の生涯に做って宝林寺の一角の東輝庵に韜晦したものらしい。

しかし、その徳風を慕って四來の雲納が陸続参集し、遂に庵中に入れ切れず、隣村近郊の独立の庵や地藏堂、観音堂、牛小屋などに常在して、定めめの提唱講座日に集まり、あるいは朝参暮請して辛酸苦修したのである。

月船の東輝庵中での生活は、清貧そのものであった。次の詩などを見ても十分に窺われる。

雪夜

乾坤供病懶。白髮石爐煙。簾外風吹雪。鰲山應未眠。

對雪

北風吹雪入遙天。白髮蕭々石榻眠。三等僧分簾外興。不知片片落誰辺。

また月船は、自賛で自分自身を次の如く評している。

自讚

富若有神助。貧似有鬼禍。貧富今不到。好一場懺懼。

諸方轉凡成聖。者裏以頭換尾。叱。不是神不是鬼。

可殺不可活。可活不可殺。殺活誰下手。頽齡七十八。

瞎秃奴。何面觜。驢相若。馬相似。無慚無愧又惺惺。齡逼古稀猶未死。

乾坤坐臥不相違。也識顛齡過古稀。何處鐘聲林外盡。一簾秋雨自霏霏。⁽¹⁹⁾

月船の法子、誠拙の「忘路集」をみると月船が如何に道根有力な師家であったかが知られる。月船禪師と題する詩を左に記しておきたい。

月船禪師

一隱三紀。影不出山。若是仏法。隔萬重関。満船載月人何忒。衲子無由窺一斑。⁽²⁰⁾

これらを綜合してみると月船という人は、自然を愛し、俗塵を嫌い、枯淡な生活を送った禪者であった。また月船は、その一面、学問を愛し、書画を能くし、文人的な人もあった。その詩集「武溪集」は江戸時代の禅僧の偈頌集の白眉といわれているほどである。⁽²¹⁾

従って、その禅風も月船独自のものであったと思われる。

月船は、東輝庵に閑居すること三十七年、天明元年（一七八一）六月十二日、八十歳で遷化した。次のような遺偈を残している。

遺偈

有過無過。不敢覆藏。末後大罪。驚殺闍王。⁽²²⁾

月船は後に朝廷から本覚浄妙禅師と諡されている。

(1) 相沢恵海著「禅学要鑑」今枝愛真著「禅宗の歴史」古

田紹欽著「禅僧の遺偈」淡川康一著「茶掛としての禅

画」禅文化41号「古月下法系」講座禅第七卷付録「仏心

宗法脈図」荻須純道著「禅宗史入門」などは月船を古月

の法嗣として記しており、川上孤山著「妙心寺史」竹貫元勝著「日本禅宗史」などは北禅の法嗣として記している。

(2) 物先海旭編「首書武溪集序」荻野独園著「近世禅林僧

宝伝

- (3) 川上孤山著「妙心寺史」小島文鼎著「続禅林僧宝伝」
- (4) 川上孤山著「妙心寺史」
- (5) 「古月録」
- (6) 前掲書。
- (7) 玉村、井上共著「円覚寺史」
- (8) 小島文鼎著「続禅林僧宝伝」
- (9) 川上孤山著「妙心寺史」
- (10) 信濃教育会発行「正受老人集」
東北大学所蔵。
- (11) 秋田市応供寺蔵「過去帳」
- (12) 玉村、井上共著「円覚寺史」
- (13) 「嘉永重撰正法山宗派図」(東海派)
- (14) 淡川康一著「茶掛としての禅画」
- (15) 物先海旭編「首書武溪集卷之下」
- (16) 玉村、井上共著「円覚寺史」
- (17) 「大日本寺院総覧」
- (18) 物先海旭編「首書武溪集卷之下」
- (19) 「忘路集」卷之下。
- (20) 禅文化15、16号所載、淡川康一「古月から仙厓へ」
- (21) 物先海旭編「首書武溪集卷之下」
- (22)